

REVIEW ESSAY

山本泰・佐藤健二・佐藤俊樹, 2013
『社会学ワンダーランド』
新世社.



そのテキストの読者は誰か？

——書評『社会学ワンダーランド』——

鈴木 洋仁

1 はじめに

その昔、東京大学駒場キャンパスにおける大学1,2年生向けの、見田宗介による社会学入門講義は、その渦の中から巣立った幾人かの著名な社会学者が語り継ぎ、半ば伝説と化している。しかし、その講義は、当時も今も書籍化されていない¹。

かたや、2010年の秋から冬にかけて同じキャンパスで開かれた学術俯瞰講義「社会学ワンダーランド」は、終了してから日が浅いこともあり、噂になるほどではないが、帯に「待望の書籍化」と銘打って2013年に出版された。「東京大学の人気講義を書籍化！」と謳う本はしばしば出版界をにぎわせるものの、社会学の、しかも、入門的なりレー講義の書籍化は、管見の限り初めてだ。

この差異は、何を意味しているのだろうか。

本稿が『社会学ワンダーランド』(以下、本書、と表記)の書評を通じて議論するのは、この差

異と、この差異を論じることそれ自体の社会学的意義であり、それは、一面では「社会学の時代」と呼ばれる流行の反映であり、他面では「テキスト革命」と称される変容の顕現である。社会学入門のりレー講義が本として流通してしまう事実や状況に、同書の書き手も評者も絡めとられてしまう、つまり、無縁ではいられない点に、本書の特徴があり、だからこそ、論じる意味がある。

2 本稿の意義と構成

本稿は、『社会学ワンダーランド』の書評論文であり、同書のモチーフを次のように位置づけている。

学術俯瞰講義という「学問分野全体を大きく俯瞰して、学問の全体像を提示する授業」で社会学を扱うことにより、「最近少しブーム」の社会学について、その「赤い糸」と「ワンダー」を見せる狙いがある。その相手は、東京大学教

養学部で1.2年生であり、大部分は、社会学を専門とは「しない」アマチュアである。素人を読者と想定して、本物の社会学の技芸を見せつけ、その学知全体を実践的に示そうとした試みが本書だ。

必修ではないこの講義を受講する学生には、社会学を学びたいという動機がある。竹内洋が述べているように、そこには、「社会学なら、なんでもやれるから」という雑学的魅力に惹かれての「顕教」(大衆)的イメージと、「社会学こそ学問のなかの学問(メタ社会科学)と知的野心を沸き立たせる」「密教」(知的エリート)的イメージ、その2通りの社会学像がある(竹内2011: 62)。本書は、その両方が存在することを示そうとする試みだ。

では、その試行の首尾はどうだったのか。本稿は、その成否を論じていく。

そして、ここでの議論は、本書と本稿それぞれの書き手のみならず、それぞれの読み手=これを読んでいる読者自身にもまた、決して無縁ではられないどころか、内輪として読まざるを得ない切実さを持っている。だからこそ、本稿は書かれる意義がある。加えて言えば、本稿の書き手は東京大学関係者という、より狭い内部に所属しているものの、だからといって、本稿は、内輪褒めや指導教員たちに向けた太鼓持ちではない。もちろん、ポジショントークなのだと思われられるかもしれないが、しかし、その危険を冒してもなお、本書と本稿それぞれの書き手と読み手がかたちづくるまとまりにとっての切実さを示す方が、社会的に重要だとする立場を採る。

以下では次の手順で議論を進めるが、断っておかなければならないのは、まず、本書の各論には立ち入らない点だ。なぜなら、本書は総体として社会学全体を体現しているからであり、

この試み、コンセプトは、現在の日本語圏における社会学の状況を実践的に提示しているからである。どこかの章だけのピックアップよりも、ひとつのパッケージとしての議論に意義があるとの立場を本稿は採る。

具体的には、はじめに、学術俯瞰講義で本書の元になった「社会学ワンダーランド」が開講されたのかを、その背景としての「社会学の時代」、ならびに、社会学の外的な要因である他の学問分野との関係=「社会学の赤い糸」に焦点を当てて論じる(→3)。続いて、「社会学ワンダーランド」と名付けられた理由、そして、その書籍が流通する意義を、社会学のマルチ・パラダイム状況や、教科書の変容をめぐる知識社会的考察に即して論じる(→4)。そして、最後に本書から得られる示唆を検証する(→5)。

3 『社会学ワンダーランド』が学術俯瞰講義で講じられる意義

3-1 学術俯瞰講義

学術俯瞰講義²とは、いったいどのようなものだろうか。

本書の「はじめに」で、編著者の山本泰が解説するように、「2005年に当時の小宮山宏東京大学総長が教育改革の試みの一つとして始められた授業科目」であり、「自然科学から人文科学までのさまざまなテーマで毎年開講されています」(ii、以下、数字のみの記載は本書からの引用ページ数を示す)。小宮山は、「知識の爆発という現象は、とても深刻な社会的な問題」になっており、「全体像が分かっている人がほとんどいないので、知識が適切に利用されにくい」(ii)ことを危惧し、「学問分野全体を大きく俯瞰して、学問の全体像を提示する授

業」(ii)をすべきだと考えたからだ³。

たとえば、直近の2014年冬学期では「情報」と「サステナビリティ」をそれぞれテーマに東京大学のさまざまな部局から講師が集められている。これまでも、「数学」や「生命の科学」、あるいは、「歴史とは何か」、「正義を問い直す」といった、自然科学・人文科学・社会科学を問わず、多様な学問分野が扱われてきた。

ただ、学問の名前に「ワンダーランド」を付けたのも、さらには、そのまま書籍として流通するのも、どちらも、この「社会学ワンダーランド」に特異だ。この2点については後述する(→4)として、まずは、社会学が学術俯瞰講義で扱われた理由について触れなければならない。

3-2 社会学が学術俯瞰講義で扱われた理由

それは、社会学が「全体を大きく俯瞰」すべき、するにふさわしい対象にまで出世したからだ。もちろん、山本泰が指摘するように、「講義をやっている間に新しい分野が出てきても講義が終わらなくなってしまうくらい、知識の爆発が社会学でも起こって」(iv)いるだけでは、社会学を学術俯瞰講義の枠内で扱うには至らない。それ以上に、他の社会科学やいろいろな分野に比べて存在感を増した社会学は、俯瞰することができる、そして、俯瞰しておかなければならない学問になったからだ。

この状況を指して、しばしば「社会学の時代」と呼ばれている⁴のは周知の通りであり、山本も本書冒頭で「社会学は最近少しブームのよう」(i)だと述べている。

ではなぜ、「政治学の時代」でも「経済学の時代」でも「哲学の時代」でも「歴史学の時代」でも「文学の時代」でもなく、「社会学の時代」なのか⁵。それは、社会学が二流の学問だった

からだ。社会学の「意外な」活躍に向けられた、驚きや悔しさや妬みの入り交じった感情が、「社会学の時代」なる表現には込められている⁶。その理由の1つは敵失であり、いまひとつは他の学問による社会学的視点の導入だ。

人文学的教養の「崩壊」、もしくは、「教養主義の意味論」の崩壊(遠藤2010)を代補するかのよう、社会学的な知識は、せり出した。小林秀雄や吉本隆明、柄谷行人といった「評論家」⁷を読むのではなく、宮台真司や大澤真幸や北田暁大といった「社会学者」に目を通す方が、何かを考えているかのような幻想に浸れるようになった。これまで知的な世界を支配していた王者たちの退位によって、社会学は相対的に躍進し、消去法の果てに「社会学の時代」は到来したのである。

学術俯瞰講義のウェブサイトによれば、「知」が増大し、複雑に絡み合っている現在、あなたの進もうとしている学問分野が思いがけない分野と交わっているかもしれません⁸との誘い文句が、専門分野を決める前の東京大学教養学部の1,2年生に向けられている。この「思いがけない分野と交わっている」様子を、山本は「社会学が他の分野にも浸透していく道筋」つまり、「社会学の赤い糸」(v)だと言いつている。内田隆三は「社会学をどれだけほかのいろいろな研究に開いて、接続していけるかみたいなの。何かそういうことも楽しみの1つ」(322)と述べる。社会学が帝国主義的に領土を拡大すると同時に、他の社会科学や人文科学は、ますます社会学の手法を真似するようになり、差は見えにくくなってしまった⁹。

本書での山本泰の表現を借りれば、「社会学は現在、いろいろな新しい領域も含めて、学問のあらゆる分野に浸透して」(v)いる。誰も社会学から無縁ではられない、無視できないほ

どに存在感が高まっている。政治学も文学も全ての学問が「社会」というとらえどころの無い茫漠とした全体性につながっているのであり、「社会的なるもの」を想定したり、「社会が社会をつくる」と考えたりする地点¹⁰に行き着かざるを得なかった¹¹。

その手法の広まりとともに、他の学問分野の停滞によって、社会学は「全体を大きく俯瞰」すべき対象(=「社会学ワンダーランド」は学術俯瞰講義で扱われる存在)に成り上がった。本書第3章で清水亮が説明するように、社会学は「学融合」の中に入り、「同じ問題を、違う分野の人たちが、テーブルを突き合わせて一生懸命議論を交しながら、いろんな技術をもち寄りながら考えて行く」(118) 必要不可欠なメンバーに昇格したのである。

これが、『社会学ワンダーランド』が学術俯瞰講義で講じられる意義にほかならない。

4 『社会学ワンダーランド』が出版された意義

4-1 本書が出版された理由

なぜ本書は出版されたのか。売れると期待されたからである。その期待の根拠は、社会学が売れる風潮であり、東京大学で行われている社会学の講義に読者がいると思われたからである。

社会学が売れる風潮とは、本書第1章で佐藤俊樹が述べている通り、「昔なら「評論家」や「経済学者」にあたる人たちまで「社会学者」と呼ばれるように」(8) なるほど、社会学(者)が売れる事態だ。世の中のいろいろな事態をお気軽に、すぐに、斬新に、単純に、解説するツールとしての「社会学」の需要が高まっていた¹²のである(佐藤2010)。

では、東京大学での社会学の講義を求める読者とは、誰だろうか。本書を、東京大学における社会学導入教育のサンプルとして読む、他の大学で社会学を講じる教え手だ。「東大ではああやっているのね」という覗き見趣味と結託し、社会学講義の事例になる¹³。そうした窃視症的欲望を持つ読者の数が多いと踏んだから、出版した。本書の出版は、社会学についての情報を仕込みたい人たちが増えている証左だ。そして、なぜ増えているのか、それは、社会学部や社会学科に所属し専門にする学生に向けて講じられる環境が少なくなっているからだ(中山2008)(→5-2)。

また、この「売れるという期待」の証左として、マイケル・サンデルや池上彰のような¹⁴「ですます」調で学生にやさしく語りかける本書のスタイルが挙げられる¹⁵。

たとえば、第3章で佐藤健二は、ことばを切り口に「見つめ直してみるの、みなさん自身の社会学のとらえ方を新たに生み出すこととけっして無関係ではない」(83)と説き、第6章で園田茂人は、「皆さん、努力して東京大学に入ってきたはず」(148)と質問をぶつけ、第9章で荻谷剛彦は、「いまこの教室にいる人たちは、皆さん同士もそうだし、僕と皆さんの関係もそうですが、ここで一緒に何かをしています」(232)と教室の一体感を醸し出そうとする。あるいは、北田暁大は第8章の末尾で、「こうしたまさしく現在進行形の問題を、現代を生きる若者である皆さんにぜひ考えてほしい」(230)と誘い水を向ける。教養的抑圧どころか、まるでサンデルや池上を真似したかのように丁寧に社会学に誘おうとする。

こうした語り口は、学問としての社会学を押しつけるのではなく、社会学を専門とは「しない」学生に少しでも知ってもらいたいと謙り、

本書が「売れてほしい」と願う態度のあらわれだ¹⁶。

4-2 「ワンダーランド」とは何か

むろん、そのようなお手軽さ「のみ」を狙って、本書は出版されたわけではない。

本稿冒頭(→1)で、名人たちの「ワンダー」＝個人芸・職人芸、と表記した。本書での山本泰の表現を用いれば、「ワンダー」とは、「社会的な対象を発見する不思議な技」(v)だという。その「ワンダー」を集めた場所＝世界が、「ワンダーランド」ということになる。が、先述のとおり、学術俯瞰講義で取り上げられた数ある学問分野の中で、「ワンダーランド」なる、見ようによってはふざけた名称を冠しているのは、なぜなのだろうか。

社会学は、「社会的な対象を発見する不思議な技」(v)を自家薬籠中のものとした職人たちの手さばきによって織り成される「ワンダーランド」としてしか示せないとの認識が、編著者たちにあったからだ。

例を挙げると、佐藤俊樹が、ソメイヨシノ以降の「一面の花色」という桜の咲き姿が明治以降に広まったことを知って、「ん、美味しそうなの匂いがするぞ」(37)と述べたところや、清水亮が「社会問題というものの現場に、そうやって飛び込むということ。そして現場の声を聞きながら、そして現場から考えること」(120)を「私自身の社会学のスタイル」だと顧みる箇所である。他にも、佐藤健二が松葉づえで歩いた体験に基づいて2足歩行と手の自由さを発見する場面(61)や、園田茂人が自らの生育環境との関係で研究のきっかけを語る姿(149)(323)等、全ての章で、それとなく、それなりに披瀝されている。

しかしそれらの姿は、あくまでも「オレの社

会学」としか言い表せない鍛錬の積み重ねの末に到達したものであって、普遍的な、一般的な、修練の道筋ではない。「ワンダーランド」になるしかない、個人芸・職人芸の寄せ集めにしかないとの認識は、社会学をとりまく「マルチ・パラダイム」状況、そして、社会学教科書の変容によってもたらされた。

4-3 「マルチ・パラダイム」状況

「ワンダー」を集めた場所＝「ワンダーランド」とは、社会学用語で言い換えれば「マルチ・パラダイム」状況(高橋1987;佐藤;1988;富永2002)だ。

奥井智之によれば、「遺憾ながら今日の社会学では、標準的な理論は見だしにくい。つまりは教員や教材によって、その講義内容や記述内容に結構バラツキがある」(奥井2014:275)のであり、他方で、もちろん、「「マルチ・パラダイム」と呼ばれる状況は、一つの問いに対する多義的な答えのありようを示している。学門的にそれは、すこぶる健全な状況にあると見ることもできる」(奥井2014:276)。

とはいえ、「ワンダーランド」と呼ぶほかない状況は、まずもって混乱と言うべきだろう。

このマルチ・パラダイムの進行を如実に示すのは、本書の執筆陣の所属である。山本泰が述べるように、「東京大学全体で、さまざまな学部・大学院や研究所をネットワークする形で社会学の教育研究が進められている」(vi)。その様子を具現するように、担当者は、総合文化研究科・教養学部から3人、新領域創成科学研究科から2人、人文社会系研究科・文学部、情報学環、東洋文化研究所、教育学研究科、医学研究科の5か所からそれぞれ1人ずつが集められた。今回は含まれていないが、社会科学研究所にも社会学者が所属しているし、法學政

治学研究科には法社会学の担当教員がいる¹⁷。

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部の社会学研究室は、言うまでもなく本流であるものの、そこでは、いったい誰が、あるいは、どの分野がメインなのか定かではない。社会学専任「以外」のスタッフを集めても、これだけの「社会学の赤い糸」が織り成す「社会学の新しい世界」を見せつけることができってしまうところにもまた、「マルチ・パラダイム」状況はあからさまになっており、「ワンダーランド」としか表現できない¹⁸。

さらには、『アエラムック 社会学がわかる』の1998年版と2004年新版末尾に掲載されている「社会学が学べる主な大学」を比較した中山伸樹によれば、前者では、「社会学科」の名称を掲げる大学は48機関、それ以外の名称の学科は87機関であったのに対して、2004年には、「社会学科」や「社会学専攻」は58機関に対して、それ以外は104機関と、合計数も162学科にまで拡大している。この拡張について中山は、「看板から中身がわからない学科名称が非常に多い。端的に言えば、この学科分類はすでに破綻している」（中山2008: 399-400）と評する。マルチ・パラダイム状況は、社会学の居場所を拡大させるいっぽうで、社会学「だけの」学科や学部を雲散霧消させる方向にも進んでいる。だから日本国内で社会学を講じる専門家のほとんどは、プロパーだけが集う空間ではなく、寄せ集めの混成部隊の中での孤軍奮闘を強いられている。

4-4 「テキスト革命」以後における本書出版の意義

また、社会学における教科書の変革の流れもまた、本書に影響を及ぼしており、社会学教科書の知識社会学の延長線においてこそ本書の

出版の意義を位置づけられる。大きな変化は、1990年前後に起きていた。

苅谷剛彦が「社会学教科書の比較社会学」と題した論文で指摘するように、「日本の社会学の講座は、文学部の哲学科におかれ、そこから枝分かれしてきた。（中略）アメリカに比べ、思想や理論の研究に重きを置いてきた。人文学的な性格が強かった」ために、ドミナントな教科書や定説は生まれえない。そこにポスト・モダンやマルチ・パラダイム状況が重なると、「盤石な「定説」がつくられないまま、社会学的「視点」のさらなる相対化運動が起きる。「科学」的スタンスが弱く、自己反省性の強い学問傾向に、さらに人文学的な相対化への拍車がかかる」（苅谷2005: 637）。

それこそ、園田茂人・山田真茂留・米村千代が名付けた「テキスト革命」であり、それは、「著者による教授から読者による学習へ」という力点の移動と、「知識の伝授から視点や視角の提示へ」という方法の転換を伴うものであった（園田他2005: 651）。

井上俊が1993年に同時代的に指摘しているように、この革命は、旧来の知識や概念を伝える「知識要約」型から、考え方や物の見方に重点を置く「パースペクティブ提示」型への移行にほかならない（井上1993）。

加えて、社会学教科書が、ひとりの著者の手によるものから、複数の書き手を集める形式へと移ってきている点も見逃ごせない。

奥井智之は、単著の社会学の教科書は、稀少な存在であったと述べる（奥井2014: 283）。けれども、日本社会学会社会学文献情報データベース¹⁹において「社会学」「著書・編書・訳書のみ」で検索をかけた2508レコードから、家族社会学等の連字府社会学や著作集を除外した579レコードをもとに分類した稲月正と木

村好美によれば、結果は逆だ。すなわち、「『単著』の比率が時代とともに低下していることがわかる」（稲月・木村 2005: 686）のであり、「テキストの内容が、1人の『大家』による原論・概論・学説紹介タイプのものから、社会学の各領域の専門家による分野ごとの概説などに変わってきている」（稲月・木村 2005: 687）。

もともと人文学的性格が強かった日本語圏の社会学、その教科書は、「テキスト革命」によって、「パースペクティブ提示」型へと、そして、複数の専門家による共同執筆へとシフトしてきた。そこで強調されたのは、「『脱・常識』を謳う、方法知としての社会学入門の流行」（刈谷 2005: 637）であり、野村一夫が述べるように、「社会学は身近な日常生活の自明性を解体」する「脱常識の知性」というクリシェ（野村 2003: 10）である。そればかりか、近森高明（2012）や奥村隆（2008）が危惧するように、そして、本書で佐藤俊樹が憂うように「常識を手放すこと自体が常識化してきている」（8、ルビは原文）のである。

社会学が「売れる」と当て込んで出版された本書には、「オレの社会学」としか言いようのない個人芸・職人芸＝ワンダーが詰まっている。なぜ、ワンダーを集めた世界＝ワンダーランドと称したのか。その意義は、「マルチ・パラダイム状況」における社会学の教科書が、「テキスト革命」によって、「知識の伝授から視点や視角の提示へ」と「パースペクティブ提示」型へと、そして、複数の専門家による共同執筆へとシフトしてきた事情に由来する。単に「売れる」見込みがあったから出版した「だけ」ではなく、社会学の学知自体、そして、教科書をめぐる大きな変化があったからこそ、「ワンダーランド」と題して出版された。ここに本書出版の意義があると言えよう。

5 本書の試みの当否と示唆

5-1 その内実

では、本書の試みは成功したのだろうか。社会学を専門と「しない」アマチュアに対して、本物の社会学の技芸を見せつけ、その学知全体を実践的に示そうとした首尾は、上々だったのだろうか。

否である。

そう認定する理由は、講義本という「わかりやすい」外見にもかかわらず、サービス精神が欠如し、本書の狙いも明示されないからである。もっとマニュアル的に、フォーマット化されたものを提示しなければならないのではないか。さもなければ、「『ああそうか』で終わってしまっはイントロダクションになりません」（316）と山本泰が危惧する通りの事態に陥ってしまうのではないか。

形式面で言っても、本書は不親切で、はっきりとした目印やスタイルがない。第1章と第2章で佐藤俊樹がBOXという形式を用いて「キーポイント」の「見える化」を試みてはいるものの、他の章には全く共有されていない。3つだけ唐突に差し挟まれる「コラム」にいたっては、意図も位置付けもかきもく示されていない。「はじめに」での山本泰による「一冊読むだけで社会学が分かることはありません」（i）という断言は、確かに真理に違いないものの、では、読者は、この本を読んで、何をつかめばいいのだろうか。個人芸や職人芸を伝えたいのならば、「ここがワンダーですよ！」と示すぐらいの最低限のサービス精神はあってしかるべきだ。

内容面で考えても、「オレの社会学」の羅列に留まり、読者に、非常に高いハードルを課し

ている。どれほど東大の先生になった人たちの試行錯誤や「オレの社会学」を見せられても、それは、社会学とくくられた「学問分野全体を大きく俯瞰して、学問の全体像を提示する授業」にはならないのではないか。

3-2 や註 9 や註 11 で論じたように、他の多くの分野とのクロスオーバーを見せられてしまうと、いったい、社会学とは、どのような対象をいかなる方法で扱う学問なのかは、ますます茫漠としてしまうばかりではないか。

本書終章で、履修者からの「結局社会学とは何なのかわからなくなった」との感想レポートを題材に交わされる編著者 3 人のディスカッションは、その場に居合わせた他の講義担当者をも置き去りにするほどの反=双方向性を示してあまりある。「わからなさ」は資源でもある(318)、ないしは、「わからない」という感覚を覚えると同時に、すごく面白いなと思ったりする(319)、もしくは、「わからなさの向こうに何かが見えてくる瞬間がある。そんな経験が社会学者を創っていく」(326)、あるいは、「わからなさが少し分節されて、それぞれの位置づけが少しみえてきた瞬間に、わかる」(326)と言われても、それこそ、佐藤健二や佐藤俊樹の言うように、「禅問答」(320)、もしくは「下手な禅問答」(326)としか受け取れないのではないか。

たとえ教師たちが読んだとしても利益は明確ではない。なぜなら、東京大学の事情はあまりにも恵まれているからだ。本書は、多分野にわたるスタッフが「さまざまな学部・大学院や研究所をネットワークする形で社会学の教育研究が進められている」(vi) 東京大学の状況をあられもなく体現している。逆に、日本語圏の大学で社会学を教える数多くの学者たちは、本書を作ろうとしても、周囲にそのような多彩さ

は望むべくもないどころか、我慢と無理を重ねて、ひとりで「ワンダーランド」を見せたことにしなければならぬ。「社会学科」や「社会学専攻」以外で社会学を講じる多くの学徒には、縁遠い絵空事と化している。

5-2 その意義

では、本書は、無惨な敗戦の記録として打ち捨てられるべきなのだろうか。

それも否である。

本稿で、その試みを「失敗である」と断言するのは、決して断罪し否定しているのではない。〈失敗であること〉の多重的な分析を通して、本書での試みとその帰結の不可避的な性格を明らかにしたいからである。

本稿で見えてきたように、社会学は、いくつものレベルにおけるメインの消失への対応に追われている。

外部について言えば、学問としての社会科学、そして、教養としての人文科学、という二大巨頭が失われた。学問分野としての政治学や経済学、行政学といった社会科学に、昔日の権威がなくなり、社会学の手法や考え方を貪欲に取り入れている点が挙げられた(→3-2、3-3)。同時に、文学や批評といった人文学の退潮により、基礎教養としての社会学のニーズが高まり、売れると期待された(→4-1)。

内部に関しては、支配的な理論や学説や分野や、それらを取り仕切る人物が現れなくなった。たくさんの分野が乱立する「マルチ・パラダイム」状況が深まり(→4-2)、それに付随して、教科書は、知識よりも考え方を教えるようになった(→4-3)。さらには、東京大学の内部においても、いくつもの学部や大学院、研究所に社会学のスタッフは散在しており、どこの誰を主流とは断定し難くなった(→

4-3)。

外を向いても内を向いてもバラバラになった現況にあっては、どこの誰が、社会学を講じようとしても、それは、各人の「ワンダー」＝個人芸・職人芸を示すことぐらいしかできない。もとより、「ワンダー」を示す前に、その「オレの社会学」を身につけられれば御の字だろう。さらには、「ワンダー」を使いこなすスタッフを集めたりレクチャー＝「ワンダーランド」を編成できるならば、それは望みうる限りで最高に恵まれた環境だと言うほかない。

にもかかわらず、あるいは、だからこそ、「ワンダーランド」は「失敗」に終わる以外にない。

口語体で「わかりやすさ」を追い求めようとしても、社会学が敵とする他の学問は外になく、社会学がベースとすべき標準的な理論も内にないために、何をどのように「わかりやすく」伝えるべきなのかは定まらない。そこで、「ワンダー」に基づいた「オレの社会学」を提示するものの、そのハードルは、逆にあまりにも高い。「社会学の時代」と喧伝され、「社会学の赤い糸」がいくつもの学問分野に見られる以上、スタンダードを共有しようと試みたが、そのレベルは、必然的に中途半端に終わってしまう。早熟な大学1、2年生からすれば「ぬるい」と感じるだろうし、大多数の愚鈍な人間から見れば「わかりにくい」と不満を抱くだろう。

けれども、だからといって、どこかの誰かに、これ以上のオルタナティブを作り出せる能力も、環境も用意されていない。社会学研究室プロパーの人間をわざわざ除いた上で集めたメンバーで「ワンダーランド」を作り出せるのは、東京大学をおいてないからだ。

ゆえに、本書を論難して喜ぶのではなく、この「失敗」の本質を受け止め、そして、我が身を取りまく困難への対処法を探り続けなければ

ならない。それが、本書の意義にほかならない。

山本泰の言葉を借りれば、「何でもありってそんな学問ありますか？」(320)という疑問に抗って、「「おがくず」の中であがいているような(中略)とらえどころのなさ」(iii-iv)を解消するために、「社会的な対象を発見する不思議な技」(v)を見せつけようとチャレンジした。このような惨状における本書の試みは、たとえ「失敗」だとしても、否、そうであるがゆえに、2つの示唆をもたらしてくれる。

5-3 2つの示唆

ひとつには、人文科学や社会科学に対して、社会学という学知が占めている現代的地位についての示唆だ。

エドワード・W・サイードは、その著 *Humanism and Democratic Criticism*²⁰ において、「人文学がなんらかのかたちで対峙しなければならない状況の変化はさまざまあって、対テロ戦争と中東の大規模軍事行動、つまり先制攻撃という新しい米軍の原則もその一つだ」とし、そのためには、「当然、現代史の記述や、社会学——政治学的な一般論が必要になる」(Said 2004: 6=2013: 8)と述べる。なぜなら、「人文学の力と重要性は、民主的で世俗的な、開かれた性質からきている」(Said 2004: 20=2013: 27)²¹ からだ。こうしたサイードの視点、つまり *secularity*(世俗性)²² を重視する姿勢とは、ごく初期の執筆活動から通底している²³。1982年に発表したレーガン主義と *textuality* をめぐる論文において、文学研究の *fields*(領野)についての規範は、「残念ですが、これはわかりません。私は単なる文芸批評家であって、社会学者ではないからです」(Said 1982: 13 → 2000: 132=1987: 267)と答える閉鎖性を招くが、しかし、重要なのは、「社会的現実

を神秘的な仕方ではなく、世俗的に見つめること」(Said 1982: 25 → 2000: 146=1987: 289)だと強調していた。

30年以上にわたって、人文学や文学の側から、社会学を取り入れる必要性は認識されていたし、サイドは、学問のタテ割り構造を越えて、より社会に開かれた=secular²⁴な形を志向し、そして、911テロや対テロ戦争に直面してなおさら、その「民主的で世俗的な」性質を重視していた。

また、他の社会科学、たとえば、経済学や心理学は、それぞれ、経済活動や市場の動き、人間の心理現象を対象として存在するという想定のもとに「客観的視点」に立った科学としての営みを洗練させるいっぽうで、「社会的世界は意味世界からなっており、意味はモノではないし経験的方法だけで接近することができない」以上、「社会学は経験主義に徹することはできない」(盛山 2013: 311-2)のは、盛山和夫の指摘する通りだ。別の例を挙げれば、日本政治学会の2014年度研究大会において、小林良彰が「データに基づかない議論には意味がない」と高らかに宣言し、選挙時の出口調査の計量分析に徹する姿もまた、科学的な営為としての進化を表している(小林 2014)。そして、菅原琢もこうした計量分析の隆盛と仮説検証型スタイルの増加をもって日本政治研究の「アメリカ化」(菅原 2010: 383)と名付けていた。

社会学以外の社会科学は、より「科学的」な方向へと方法を研ぎすませていたのに対して、社会学は、そうした方法論やスタンダードづくりにおいては、逆に、「マルチ・パラダイム」状況が蔓延し、拡散の傾向を強めていたことは既に指摘した(→4-3、4-4)通りだ。

人文学は社会学を取り入れようと試み、社会科学はそれぞれのやり方を発展させてきた中

で、社会学はあちこちに拡散し伝播している、と言えば聞こえはいいが、より弱毒化された平板な形での社会学風味をまぶした研究が、各地に薄く広まった(今田他 2008)。そればかりか、「マルチ・パラダイム」状況の果てに、現在の、特に日本語圏の社会学内部で起きているのは、何の疑いもなくディプリンを信じてやまない人々の跋扈だ。「目的・方法」と「結果・結論」の明示が義務づけられた日本社会学会の報告申込用紙に象徴されるように、仮説検証型の自然科学モデルで、何かの結論を発見したことにしておきたい欲望はあからさまになるばかりだ。社会学全体どころか、その中の小さなディプリンをフォーマット化できるという信憑がはびこる。「私は〇〇の専門なので」「僕は××先生の弟子だから」といった、ディプリンをさらに細分化して恥じないことが飛び交う。

齋藤圭介が明らかにしたように、代表的な学会誌『社会学評論』と『年報社会学論集』への年間投稿数の会員比は、それぞれ、1.7%と4.9%であり、「編集委員会が編集後記などで積極的な投稿を繰り返し呼びかけている現状を考えると、学会の認識としては非常に少ない投稿率」(齋藤 2013: 91)に留まっている。それほどまでに、社会学の内部は細切れになり散り散りバラバラになっている。

人文学のようなsecularな視点でもなければ、他の社会科学のような方法的発展でもなく、より狭い小部屋に自閉しているかのように見えるのが、今の社会学ではないかとの示唆も、「ワンダー」や「オレの社会学」が展開される本書の「失敗」から得られる。

また、社会学教科書としての帰結から得られる示唆もある。

本書の「失敗」の理由として本稿が挙げた、形式面での不親切さと、内容面でのあいまいさ

もまた必然と言うほかない。竹内洋の言う「社会学なら、なんでもやれるからという雑学的魅力に惹かれての」「頭教」(大衆)的イメージは、もはや教科書のレベルでも流通していない。ひとりの大家が、さまざまな知識を伝授するのではなく、多くの専門家が、見方を提示する方向へと、教科書は「テキスト革命」を遂げていた。受験参考書のように定型の知識を伝えられず、そして、明確な社会学の像も描けない。それゆえに、本書は「失敗」せざるを得ない。

ただ、このように、本書の試みの結果が必然であるとしても、あるいは、そうであるがゆえに、本書の書評は本稿が書かれるまであらわれなかった。前章で概観したような、社会学教科書の知識社会学、もしくは、教科書的知の知識社会学と、大上段からわざわざ論じないかぎり、社会学の教科書や入門書を論じる動機は喚起されないのが現状だ。「パースペクティブ提示」型の教科書が主流になり、脱常識の常識化が進めば、「見方は人それぞれだよな」という、さらなる「マルチ・パラダイム」状況を招く。扱う対象や用いる方法だけではなく、視点や視角・考え方も、バラバラに散逸するほかない。すると、そうしたパースペクティブを「ワンダーランド」として提供する本書には、「そういうやり方もあるよね」と反応するのみで、いちいち書評する意欲を沸き立てられない。

さらに、英語圏におけるアンソニー・ギデンズなどによる分厚い教科書定番は(Giddens&Sutton 2013; Haralambos&Holborn 2013)は、日本語圏にはない。誰もが参照する決定版はなく、これまでも、そして、これからも社会学の教科書や入門書は、姿・形を変えて出版され続ける。「どの先生も良いテキストをつかいたい、良いテキストがなければ自分で書いてつくりたいと思って」(大前 2002: 16)

いるからだ。受講する学生への売上と、「社会学の時代」の潮流を見越して、社会学の教科書・入門書は、本書のように「売れるという期待」を背負って、次から次へと出版される。読まずに書くのである。

いちいち、それらを書評する社会学者は、ほとんどいない。本書の「失敗」とは、あるいは、本書での試みとその成否の不可避的な性格を明らかにする営みとは、それ自体がパフォーマンスに教科書的知の置かれた状況についての知識社会学的示唆の獲得につながるのである。

6 結語

1950年創刊の『社会学評論』第3号に掲載された「座談会 社会学とその周辺」には、名だたる社会学者が参加している。文化人類学の石田英一郎、経済学の高島善哉、法社会学の川島武宣、政治学の丸山眞男、といった面々が、尾高邦雄、日高六郎、福武直、という当時の東京大学社会学の助教授を前に、社会学のアイデンティティーを説いている。

尾高は福武とともに、日本学術会議や大学における社会学の不利な扱いに不満をあらわにする。その理由は、「他の社会科学では比較的閑却されている現実の一面にその関心の頂点を持たなければならない。之によって社会学は一つの専門科学となることができる」(福武他 1950: 64)からであり、「経済学者や法学者が社会学の領分の方へと戦線を拡大して来た」(福武他 1950: 69)からでもあり、「社会学というものをあまり小さなものに考えずに、現実に必要な社会学がいろいろな形でできてくるのを許容するということが必要」(福武他 1950: 84)と宣言する。

これに対して、高島と丸山は余裕を見せる。

高島は、一橋大学社会学部の創設の際に、文部省に対して、「官吏をつくるのは今までは法科、政治科の仕事であったが、新しい社会学科は新時代の公務員の外に、政治家、ジャーナリスト、それから社会事業家、教育者をつくるんだと言って」（福武他 1950: 79）説得したと振り返る。丸山は、「社会学の場合でも、歴史的観点を強調するあまり、歴史的な過程それ自身の説明になってしまうと、歴史学の中に解消してしまう」（福武他 1950: 80-1）と危惧する。その訳は、「社会学がいろいろの分野で貢献することは確かですけれども、問題はそうした業績が根本的にどういう目的に仕えるかという事」（福武他 1950: 86）だからだ。

「社会学の時代」などという標語が思いもよらなかった時代から、社会学のアイデンティティーは明確ではなかった。社会学は、もともとその独自性が自明ではないからこそ、あるときには「他の社会科学では比較的閑却されている現実の一面に」関心を持つことによって、他の分野が手をつけていない方法や対象や発想や発見を用いた切り返しを得意技としてきた。だから、既存の学問に対する「社会の役に立たない」という不平不満の受け皿となって、「社会の役に立つ」かのような幻想をふりまいて延命し、のさばってきたとも言えるし、あるいはもちろん文字通り「社会の役に立ってきた」とも言えるだろう。だが、本稿で論じてきた通り、もはや時代は、そこにはない。そのような変貌への対処として、本書は書かれた。

付言すれば、本書第1章で扱われている少年の凶悪犯罪と、それにまつわる社会学者の分析が耳目を集めたのは、1990年代後半から2000年代初頭にかけての事態であり、佐藤俊樹がこの講義を行ない書籍にまとめた2010年から2013年にかけては、もはや、「最近少し

ブーム」とは言えず、メディアでは流行遅れとなっていた。それほどまでに、社会的な考え方を世の中が取り入れるまでに、日本語圏の社会は、成熟の度合いを高めている。

ゆえに、本書が「失敗」するのは必然なのである。

学知の世界にとどまらず、世の中もまた、社会学化とでも言うべき傾向を強めているのであり、社会学は、「脱常識」を謳う場所や、切り返しで得意になっている地点には、もう安住してられない。

本書は、社会学を専門と「しない」大学1・2年生を相手にするならば、もっとマニュアル的に、もう少しやさしく、ずっとわかりやすく書き下ろす道があっただろう。なぜなら、同じ東京大学駒場キャンパスの人文科学からは、既に今を去ること20年前、『知の技法』という教科書・マニュアル本として世の中に関わっていたからだ²⁵。あるいは逆に、より抑圧的に、さらにハイブラウに、高い教養を要求しても構わなかった。「社会学の時代」に「社会学の赤い糸」が絡まり合う「社会学の世界」をみせられる東京大学の特異性・独自性をこそ相対化する「東京大学の社会学」の社会学の展開によって、社会学全体の布置を見通す方途がありえた。しかしながら、本書の試行は、本稿で明らかにしたように、「失敗」であることによって、社会学の外部と内部を照らし出したし、この結果は、東京大学という恵まれた空間においてさえ陥らざるを得ない必然だった。ゆえに、社会学を専門に「する」大学院生や、そして、本稿が掲載される「書評ソシオロゴス」の読者たちこそ、本書の試みの成否を受け止めなければならない。であればこそ、本書の書評を、東京大学の大学院生が執筆する意義があるのであり、本書の読者とは、他ならぬ私たちなのである。

注

¹ その一端は、見田（2006）に収められているが、同書は講義の書籍化ではない。

² 東京大学大学総合教育研究センターの藤原毅夫の分析を借用すれば、「この講義の中で「知」の大きな体系や構造を見ることにより、学生自らが現在学んでいる授業科目の意義や位置付けを認識し、将来への展望を見出すことによって、学びへの動機を高めることを目的としている」（藤原 2008: 33）。さらに、「これらの講義では、数名の教員で講義のテーマや内容のアウトラインを作成した後、世界的にも著名で最も適任な教員に依頼し、改めて講師にアウトラインを作成した教員を交えて講義内容を検討するという、大変手間のかかる作業で作成している」（藤原 2008: 33、下線は引用者）。

³ 『社会学ワンダーランド』は、東京大学教養学部で2010年冬学期に開講された「学術俯瞰講義：社会学ワンダーランド」全13回のうち、初回と第6回を除いた11回をほぼそのまま起し、その上で、第11章を加筆した形で作られている。管見のかぎりリレー講義を書籍化した社会学の入門書は存在せず、itunes や web サイトで講義映像を視聴できる類書はない。

<http://ocw.u-tokyo.ac.jp/lecture?id=11328&r=1391261964> (最終アクセス日 2014年10月29日)

⁴ たとえば、『朝日新聞』2010年2月6日朝刊は「社会学の時代なの？ なんでも研究対象」と掲げた特集記事を掲載し、雑誌『論座』2006年2月号の座談会「社会学は進化しつづける」のリード文には、「社会学者が元気だ。世の中を『社会的なるもの』が覆い、メディア上でも社会学者が活躍している。こうした「社会学の時代」をどう見るか」とある。さらにさ

かのぼっても、『日本経済新聞』1995年11月19日朝刊は「社会学の時代」再来 平易に現代を読み解く」と題し、「あらゆる社会現象を研究対象とするだけに、新しい分野の開拓も成果を挙げつつある」と伝える。

⁵ たとえば、丸山眞男が耳目を集めていた時代を「政治学の時代」とは呼ばなかったし、山口昌男の登場をもってしても「文化人類学の時代」とも呼ばれなかった。他方で、「ニューアカデミズム」は、特定の領域を名指さずに越境する姿勢にこそ、「ニュー」と称される新しさがあった。加えて、政治学や経済学、あるいは、法学や行政学は、もとより重要度を疑われていないから、ことさらその「時代」を強弁する必然はない。

⁶ 余談ながら、評者がときおり参加する外交官や実務家、学者を集めたシンポジウムやセッションに、社会学者が招かれることはほとんどない。これは、日本語圏の社会学者の英語力ゆえとも言えるが、いまだ学問としてマイナーな存在だと思われ知らされる。他方で、2014年7月に横浜で開催されたISA(International Sociological Association) World Congress には、全世界から約6000人の参加者が集った。英語を媒介とする社会的なコミュニケーションは広まり続けるいっぽうで、日本語を母語とする社会学者の活躍は、さして目立たない。この事態も、十分に社会的な考察の対象となりうるとはいえ、本稿では論じない。

⁷ 社会学だけが突出してその「時代」を喧伝される裏側には、以前は主役の座にあった学問の後退がある。「政治学の時代」と言わなくても、あるいは「経済学の時代」と誇張しなくても、それぞれの学問分野にスターがおり、学者界限でもメディアでも、華々しい活躍を見せていた。丸山眞男にせよ大塚久雄にせよ、宇沢弘文

にせよ、偶像だとしても、虚像だとしても、知的な営為に少し関心のある人間なら誰もが知っている名前が轟いていた。

⁸ 「学術俯瞰講義ってなに？」 <http://www.gfk.c.u-tokyo.ac.jp/about> (最終アクセス日 2014年10月29日)

⁹ ことは日本語圏だけではなく、英米圏で見ても、T.J.Clarkの一連の研究は、素朴な絵画研究ではなく、19世紀中盤の時代精神を解明するために多様な資料に当たり、ほとんど社会学とも言える手法で対象に迫っている。フランス語圏で考えても、*mentalité* に焦点を絞ったアナル学派のスタイルは、従来の歴史研究からはみ出し、歴史社会学に漸近していった。カルチュラル・スタディーズの隆盛を見るまでもなく、文学研究は、当時の出版市場のあり方にも範疇を拡大し、作家個人の研究はもとより出版文化を捕まえようと試みてきた。

¹⁰ たとえば、近代日本文学を専門とする安藤宏は、小説と社会との関係について、素朴反映論でもなく、双方向性を重視するとして「表現機構」という概念の重要性を提唱しているが、これもまた、そういった視点の顕現だと言えるだろう(安藤 2012)。

¹¹ 本書の構成から言えば、第3章「ことば」の不思議は日本語学や言語学が、第7章「探偵小説におけるテキストの不安」は文学が、それぞれ取り入れている対象や方法と軌を一にしており、差分ははっきりしない。第1章では、長谷川寿一と長谷川眞理子の研究が引用されるように、法社会学や社会人類学と重複する。第2章「桜見る人、人見る桜」や第4章「怪物のうわさ」は、歴史学や民俗学、文化研究で扱われても不思議ではない。第5章「建築紛争の現場から」と第8章「広告都市をめぐって」は、都市計画や行政学の喫緊のテーマである

し、第6章や第9章はそれぞれ教育学者が熱を入れている主題＝格差を扱う。また、第10章と第11章は医学や保健学といったケアに携わる人々の注視する話題だ。

¹² 具体的には、宮台真司や大澤真幸といった論者の流行、『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』(遥 2000)の出版が象徴していた。

¹³ 古くは明治10年代の校外生制度に始まり、丸山眞男講義録や、最近でも、政治学者の原武史『知の訓練』(新潮新書、2014年)に至るまで、日本においては大学の講義を書籍化した本へのニーズがある。原武史が愚痴を並べるように、『知の訓練』は、東大や京大などの教授や准教授にはいっさい謹呈しなかった。「こんなに程度の低い授業をやっているのか」と思われるに決まっているからだ(原 2014: 34)、「もっともこんな本は、東大教授や京大教授なら恥ずかしくて出せないだろう」(原 2014: 31)などと

いったヒガミを誘発する。本の売上で自尊心を満たされたとしても、他方で、新書で売れる程度の、低レベルの授業をしている事実には、羞恥心を覚える。そういった大学教師の卑しさにつけこんで売ろうとする動機があったのかどうか、それは、本書を読む限りでは判然としない。

¹⁴ いずれも、学生や聴衆からの質問を「いい質問ですね」と、まるでFacebookの「いいね!」のように褒め称え、インタラクティブな雰囲気醸成を醸し出し、講義を進めていく。学生を知識や教養や態度で抑圧するのは正反対に、彼らをencourageするサービス業じみた姿勢が見てとれる。学知もまた消費の対象だと割り切っている態度が見てとれる。

¹⁵ あるいは、学術俯瞰講義「社会学ワンダーランド」を受講した大学1・2年生にとって最も身近な講義本といえば、大学受験参考書の「実況中継シリーズ」(語学春秋社)だろう。予備

校の有名講師の講義を活字化したもので、「キーポイント」や、「ここが入試に出る！」といった要点が明確で、かつ、書き手も読み手も、「入試に合格する」という明々白々な目標を共有している以上、わかりやすさが信条だ。大学受験産業はゆるぎない目的に向けたサービス業だから、わかりにくくては話にならない。

¹⁶ 付言すれば、本書の書き手も、評者も、そして読者もまた、消費者として知識を享受してきたのではないか（加藤 1993）。

¹⁷ このマルチ・パラダイム状況において、東京大学のどこで社会学を学べばよいのかを学生に示そうとした。それも「社会学ワンダーランド」開講の意図だった点は、本書には再録されていないが、編著者の佐藤俊樹が初回の講義で述べている通りだ。

¹⁸ 本書の外に目を向けても、学会誌『社会学評論』の2つの変化が、「マルチ・パラダイム」を裏書きする。ひとつは、1994年に始まる、論文表記を縦書きから横書きへの変更だ。これは、日本語圏に特有の縦書き表記では済まなくなり、1986年の数理社会学会設立に現れているように、横書きでしか表現できない対象や方法へと社会学がウィングを広げた証左である。いまひとつは、2000年以降、同誌が前年の日本社会学会大会報告題目の掲載をとりやめた点である。もちろん、大学院重点化に伴う院生数の爆発が学会誌への投稿増大につながり、対応するために掲載論文を増やさなければならなくなった、というスペースの問題がある。その上に、報告題目を載せたとしても社会学の「いま」を見通せない無力感を反映していたのではない

か。学会誌と学会大会のつながりは薄れ、連字府社会学は独立し細分化し、大きな流行や潮流が曖昧になった混迷を、この2つの変容は表している。

¹⁹ 東北大学サイト 2005年6月閲覧。2014年3月31日サービス終了。

²⁰ 邦題『人文学と批評の使命——デモクラシーのために』（2013、村山敏勝・三宅敦子訳、岩波現代文庫。）

²¹ こうしたサイドのhumanism理解について、盟友ホミ・バーバは、「日常生活の実践のなかで語り占める場所についての実り豊かな省察」（Bhanha 2005: 375=2009: 19）と評する。

²² secular criticism〈世俗批評〉とは、「新批評以降の高度に「洗練」された英米の文学制度の閉鎖性、政治的無関心、保守性を批判し、既存の言説の外側に対抗的な批評意識の視座を見出そうという試み」（中井 2003: 42）であり、「〈始まり〉ないしは〈始めること〉の本源的な「異教性」、つまりは神的な起源から断ち切られたところでみずからの始まりをたえず歴史発生的につくり出していく可能性に立脚したところからの批評」（上村 2003: 148）である。

²³ また、refugee(亡命)、exile(故国喪失)、と並ぶ3つの重要なモチーフのひとつとして自ら挙げている（Said 2001=2007）。

²⁴ 英語圏における最新の研究成果は、次の論集にまとめられている（Döring & Stein 2012）。

²⁵ こうした「ただのマニュアル」としての側面への批判として、坪内祐三による「芸文」との対比を挙げておきたい（坪内 1997）。

文献

- 安藤宏, 2012, 『近代小説の表現機構』岩波書店.
- Bhabha, Homi, 2005, "Adagio," *Critical Inquiry*, 31(2): 371-80(= 2009, 上村忠男訳「アダージョ」ホミ・バーバ, W.J.T. ミッチェル編『エドワード・サイード 対話は続く』みすず書房.)
- 近森高明, 2011, 「解説 常識が二度揺さぶられる不思議なテキスト」作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』ちくま学芸文庫, 427-32.
- Döring, Tobias and Stein, Mark eds., 2012, *Edward Said's translocations : essays in secular criticism*, London, Routledge.
- 遠藤知巳, 2010, 「序論 フラット・カルチャーを考える」遠藤知巳編『フラット・カルチャー 現代日本の社会学』せりか書房, 8-49.
- 藤原毅夫, 2008, 「教養教育と工学教育の連続性」『工学教育』56(1): 32-6.
- 福武直・石田英一郎・尾高邦雄・川島武宣・高島善哉・日高六郎・丸山眞男, 1950, 「座談会 社会学とその周辺」『社会学評論』1(3): 59-87.
- Giddens, Anthony, and Sutton, Phillip, W, 2013, *Sociology*, 7th ed, Cambridge, Polity Press.
- Haralambos, Mike, and Holborn, Martin, 2013, *Sociology*, 8th edition, Collins.
- 原武史, 2014, 「日記」『みすず』みすず書房, 630: 28-38.
- 遥洋子, 2000, 『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』筑摩書房.
- 今田高俊・長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志, 2008, 「新しいスタンダードを求めて——社会学教育とテキスト『社会学』をめぐる [下]」『書齋の窓』576: 2-16.
- 稲月正・木村好美 2005 「社会学テキストの類型化とレビュー——近年の社会学テキストの特徴と課題」『社会学評論』56(3): 685-709.
- 井上俊, 1993, 「私の大学教科書論——社会学」『IDE・現代の高等教育』349: 33-7.
- 荻谷剛彦, 2005, 「社会学教科書の比較社会学——大学における教授—学習過程と知識の社会的構成」『社会学評論』56(3): 626-40.
- 春日英明, 1967, 「東京大学における公開講座」『社会教育』22(12): 32-5.
- 加藤秀俊, 1993, 「社会科学の消費者たち」『岩波講座 社会科学の方法 第IV巻 社会科学の現場』岩波書店: 97-125.
- 小林良彰, 2014, 「代議制民主主義の変容と課題」日本政治学会 2014 年度研究大会報告原稿. 共通論題「政治改革以降の日本政治の変容 ～20 年後にみる政治改革の意義」2014 年 10 月 11 日, 早稲田大学.
- 見田宗介, 2006, 『社会学入門——人間と社会の未来』岩波新書.
- 中井亜佐子, 2003, 「ネイション・語り (ナレイション)・世俗批評家——エドワード・サイードをめぐる」『一橋論叢』130(3): 209-25.
- 中山伸樹, 2008, 「社会学教育改革のための基礎枠組みとしてのプロフェッション論」『社会学評論』58(4): 395-414.
- 野村一夫, 2002, 「ネットワーク時代における社会学教科書の可能性」『フォーラム現代社会学』2:

6-13.

奥井智之, 2014, 『社会学 第2版』東京大学出版会.

奥村隆, 2008, 「学生は社会学になにを見出しているか——社会学教育委員会調査から見る社会学教育の「岐路」」『社会学評論』58(4): 415-35.

大前誠, 2002, 「メーカー・オブ・テキストの現場から」『フォーラム現代社会学』2: 14-21.

Said, Edward, W., 1982, "Opponents, Audiences, Constituencies, and Community," *Critical Inquiry*, 9(1): 1-26. Reprinted in: 2000, *Reflections on Exile and Other Essays*, Harvard University Press, 118-47. (= 1987, 室井尚訳「敵対者、聴衆、構成員、そして共同体」ハル・フォスター編, 室井尚・吉岡洋訳『反美学 ポストモダンの諸相』平凡社, 246-92.)

———, 2001, *Power, politics, and culture: interviews with Edward W. Said edited and with an introduction by Gauri Viswanathan*, Pantheon Books. (= 2007, 大橋洋一・三浦玲一・坂野由紀子・河野真太郎・田村理香・横田保恵訳『権力、政治、文化 エドワード・W・サイド発言集成』太田出版.)

———. 2004, *Humanism and Democratic Criticism*, Columbia University Press. (= 2013, 村山敏勝・三宅敦子訳『人文学と批評の使命——デモクラシーのために』岩波現代文庫.)

齋藤圭介, 2013, 「学会誌における若手研究者の実態——『年報社会学論集』と『社会学評論』の比較から」『年報社会学論集』26: 87-98.

佐藤俊樹, 1988, 「理解社会学の理論モデルについて」『理論と方法』3(2): 151-70.

———, 2010, 「社会学／「社会学」背中あわせの共依存あるいは「殻のなかの幽霊」遠藤知巳編『フラット・カルチャー 現代日本の社会学』せりか書房, 393-400.

盛山和夫, 2013, 『社会学の方法的立場——客観性とはなにか』東京大学出版会.

園田茂人・山田真茂留・米村千代, 2008, 「テキストづくりの論理と力学 編集者の証言」『社会学評論』56(3): 650-63.

菅原琢, 2010, 「「アメリカ化」する日本の政治学——政権交代後の研究業界と若手研究者問題」東浩紀・北田暁大編『思想地図』NHK ブックス, 5: 381-405.

鈴木貞美, 2014, 『日本文学の論じ方——体系的研究法』世界思想社.

高橋徹, 1987, 『近代日本の社会意識』新曜社.

高田康成, 2010, 『クリティカル・モーメント——批評の根源と臨界の認識』名古屋大学出版会.

竹内洋, 2011, 『大学の下流化』NTT 出版.

富永健一, 2002, 『戦後日本の社会学——一つの同時代学史』東京大学出版会.

坪内祐三, 1997, 『シブい本』文藝春秋.

上村忠男, 2003, 「無調のアンサンブル——エドワード・W・サイドと人文主義の精神」『現代思想』31(14).

(すずき ひろひと、UTCP、hirohitoyoojin@gmail.com)

(査読者 遠藤知巳, 葛山泰央)